

# 幼児期の年中行事体験を生かした 保育の在り方について

## — 学生の年中行事体験に関する実態調査を通して —

恒岡 宗司・中田 章子・西田 外美江

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

### How Best to Incorporate Participation in Annual Events into Child Care: A Fact-finding Investigation of Students' Participation in Annual Events

Munechika Tsuneoka・Noriko Nakata・Tomie Nishida

*Naragakuen University Narabunka Women's College*

節分、ひなまつり、こいのぼり、七夕など今日まで伝承されている我が国の代表的な年中行事は、年齢の如何を問わず誰の記憶にも残っている。本学の学生に尋ねても全員が覚えていた。本研究は、年中行事と保育との関係について、保育者を目指す学生を対象に幼児期の年中行事体験及び意識に関する実態調査（平成27年度）を行うとともに、授業による実践研究（平成28年度）に取り組んだものである。多くの幼稚園・保育所等では年中行事を効果的に保育に取り入れ、園行事としての催しを楽しんでいる例が多くみられる。

筆者らは、幼児期の子どもたちの保育を担う学生たちが自分の幼児期の体験を振り返るとともに、保育職に就くまでに民俗文化の一つとしての年中行事の由来や意味等について理解を深め、子どもたちに価値ある体験として年中行事を取り入れた保育の工夫を考えてほしいと願っている。本研究では、学生自身のもっている幼児期の年中行事体験や自らの体験を生かした保育の在り方についての意識を明らかにするとともに、「子ども学ゼミ（年中行事）」の活動を通して年中行事に対する意識の変容を考察する。

**キーワード：**年中行事体験、年中行事と保育、子ども学ゼミ（年中行事）

## 1. はじめに

年中行事や伝承的な遊びを取り入れた保育を実践している幼稚園・こども園は、平成27年度に奈良県国公立幼稚園・こども園を対象とした調査結果<sup>1)</sup>から多いことが明らかになっている。このことは本学紀要第46号にまとめている。筆者らは、これまで授業の中で多くの学生との会話を通して年中行事に対

---

恒岡 宗司・中田 章子・西田 外美江 〒631-8523 奈良県奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

する理解度や関心度の低さを痛感している。また、幼児期に体験してきた年中行事であっても、保育に生かせる価値ある体験として認識していないことも十分に予想される。そのため、本研究1年目には学生の年中行事に対する幼児期の体験に関する記憶と意識の実態調査を行い、その集計結果の分析を通して自らの幼児期の年中行事体験を保育に生かそうとする意識をいかに醸成していくかの方途を探ることとした。そして2年目には年中行事を保育に生かす価値について再認識できるよう、試行的な授業づくりをゼミ活動として取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

研究目的については、保育者自身の幼児期における年中行事体験が保育に有効性を発揮できるかどうかについての問題意識が発端となっている。そのため学生の年中行事体験の有無及び幼児期の記憶と意識の実態を把握することから取り組んだ。保育現場の実態については、平成27年6月に奈良県国公立幼稚園・こども園を対象に、園における年中行事及び伝承的な遊びの取扱いのアンケート調査を実施し、同アンケート結果からは、多くの幼稚園・こども園において年中行事を計画的に園行事や教育活動として取り入れている実態を数値的に明らかにできた(回答118園)。

奈良県内の保育所に対する同調査は実施していないが、筆者らの保育現場での勤務経験からほぼ同様の傾向がみられると考えている。

同アンケートでは、園長に対して「伝承的な行事や関連する伝承的な遊びを幼稚園において子どもたちに経験させることについて」の意見を自由記述方式で求めたところ、多くの示唆に富む提言や課題が書き込まれていた。筆者らが特に注目した点は、園長として文化や伝統に関わる年中行事や伝承的な遊びを保育に取り入れることに対して、その意義や有効性を認めている中で、現状の課題として若い世代に当たる保護者や保育者自身が年中行事や伝承的な遊びに対する知識や体験等が不足していることを指摘している意見がみられたことである。特に若い保育者の実態については、次のように記述されていた(注：本学紀要第46号の記述内容から関係部分を抜粋して再掲)。

「教師自身が伝承行事を体験しているか、又何故するのかをどれだけわかっているかといったことも少々問題である。特に若い先生が多い中、どんないわれがあるのかをしっかりと勉強してからでないといけないと思う。(天理市公立幼稚園長)」

「年中行事の意味を知る若い職員も少ないこの時代、大切なことを職員にもしっかり引き継ぎ伝えていけたらと考える。(香芝市公立幼稚園長)」

「先生の年齢層が若くなっているので、わらべうた、自然物を使った遊び、竹馬などの研修に出かけている。(大和郡山市公立幼稚園長)」

こうした意見は、保育実習や幼稚園実習に参加する学生にも当てはまることからであるが、本学の実習時期の関係及び園の取組によっては全員が年中行事に関する保育を体験させてもらえる機会は限られている。実習で体験できる可能性としては、1年次の幼稚園実習での小正月行事か保育実習での節分行事や桃の節供行事、あるいは2年次の保育所・施設実習での七夕行事、幼稚園実習での中秋の名月行事

ぐらいである。そこで、本研究を進めるに当たっては、次の二つの研究仮説を設定した。

- (1) 学生自身に幼児期の年中行事体験の意識を顕在化させることが、保育者としての資質向上につながるのではないか。

保育者としての資質には文化に対する深い理解が含まれており、日々の保育内容の豊かさと密接に関連している。そのためにも保育者自身が幼児期に体験した年中行事を意識の中に顕在化させることが必要であるとの考えから設定した。

- (2) 大学の科目内容の中に年中行事を適切に取り入れていくことが、学生自身に年中行事と保育の在り方について考えていくきっかけとなり、保育者として保育の中に取り入れようとする意欲の醸成につながるのではないか。

保育者を目指す学生にとって、年中行事に対する自らの幼児期の体験を日常生活の中で意識する機会は少ない。そのため、大学での授業や実習の中で子どもたちと一緒に再体験することを通して、年間指導計画を作成する際に年中行事の視点からも留意していくことができるようになるだろうとの考えから設定した。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 調査対象及び調査方法

〔調査対象〕

学生への実態調査の目的については、前述したように単に学生の幼児期における年中行事体験に対する記憶や意識の実態把握だけでなく、卒業後は保育職に就く者として自らの体験を意識の中に顕在化させていくことも意図した。そのため、卒業年次後期の教職実践演習を履修している2回生の2A（21名）、2B（18名）、3回生の3C（21名）、3D（17名）の4クラス計77名を調査対象とした。学生たちは、卒業年次の10月までに保育実習270時間、幼稚園実習180時間以上を経験してきており、実習先では何らかの年中行事関連の保育を体験してきていることが調査対象とした理由である。

〔調査実施期間と回答方式〕

調査の期間は平成27年10月から11月にかけて、教職実践演習の授業の中でクラスごとに実施した。授業では、調査の前に年中行事個々の概要のほか調査の趣旨や記入方法の説明を行うとともに、倫理的配慮として得られた回答については統計的に処理し学生個人の名を出さないこと、研究用の基礎データとして活用することの同意を得た上で実施した。また、調査対象である個別の年中行事や伝承的な遊びの体験については、前述の奈良県国公立幼稚園・こども園の園長を対象に実施したアンケート調査での項目に準じ、回答に当たっても同様の選択肢による複数回答方式とした。

学生たちは翌年4月から保育者として子どもたちの前に立つことから、調査では保育に取り入れる場合を想定した質問項目を新たに加え、自由記述方式で回答を求めた。なお、伝承的な遊びについては行事との関連もみられるため質問項目として取り上げているが、その分析については別の機会に行いたいと考えている。

### 3.2 調査内容

調査内容としては、幼児期の年中行事や伝統的な遊びの体験について、次の観点(1)～観点(8)を設定して質問を構成している。回答に当たっては、幼児期の居住地も府県名で書いてもらうことにした。その理由は、年中行事の中には全国的に行われているものもあれば、地域固有の伝統的な行事として行われている場合もみられる。また、本学の学生は奈良県内からの入学者が最も多いが、近畿地方はじめ西日本各地からも入学してきていることから、幼児期にどこで体験しているかを考慮しなければならない可能性が出てくると考えたためである。

- 観点(1) 体験場所（保育所・幼稚園で、家で、地域で）
- 観点(2) 体験の様子（自分の遊び・見たこと食べたこと等として、園での行事や遊びとして、地域の行事に参加して）
- 観点(3) 体験相手（友達と、家族と、地域の人と）
- 観点(4) 調査項目以外の年中行事や伝統的な遊びの体験
- 観点(5) 現在の自分の心に強く残っている年中行事や伝統的な遊びの体験（調査項目とそれ以外）
- 観点(6) 保育者として子どもたちに体験させたいと考えている年中行事や伝統的な遊び
- 観点(7) 保育実習や幼稚園実習で出会った年中行事や伝統的な遊び（環境構成として・保育内容として）
- 観点(8) 本学で取り組んだ年中行事や伝統的な遊びに関する製作活動や遊び等

主質問項目は観点(1)であり、観点(2)～(4)は観点(1)を補足する目的で設定した。観点(1)～観点(4)については、選択肢方式による回答であり学生の実態分析のための基礎資料とし、観点(5)～観点(8)については、自由記述方式のため研究仮説を検討していくための参考資料として活用することとした。

なお、観点(1)～観点(4)の年中行事や伝統的な遊びの体験については、次に示すとおり年中行事関係では20項目、伝統的な遊び関係では11項目の計31項目を設定し、それ以外の行事や遊びへの対応として「[その他]」の欄を設けて、地域に伝承されている固有の行事等に対して学生が自由に記述できるようにした。

#### [年中行事関係]

門松、餅つき、しめ縄、雑煮、七草がゆ、トンド、節分の豆まき、イワシの頭とひいらぎの小枝飾り、ひな飾り、菱餅、ひなあられ、こいのぼり、ちまき、かしわ餅、伝統的な地域の盆踊り、新しい地域の夏祭り、名月（十五夜）の飾り、名月（十五夜）の月見だんご、古くからの地域の秋祭り、冬至のカボチャ

#### [伝統的な遊び関係]

たこあげ、こま回し、はねつき、すごろく、カルタ、百人一首、福笑い、鬼の面作り、おひなさま作り、かぶと作り、七夕の笹飾り

## 4. 調査結果

### 4.1 集計結果についての分析

前述したように、本稿では年中行事関係に絞って分析していくこととする。ちなみに学生77名の幼児期の居住地分布は次のとおりである。奈良県内(43名)、大阪府・京都府・和歌山県・三重県などの近畿地方(29名)、近畿地方以外(5名)となっており、奈良県内居住者が約56%を占めている。実態調査の集計結果からは、全国的にみられる年中行事への回答数がほとんどを占めたため、分析に当たっては幼児期の居住地に対する考慮は必要がないと判断した。

調査の集計結果をもとに学生に年中行事体験の聞き取りをしてわかってきたことは、回答の傾向として、「鬼の面作り、おひなさま作り、かぶと作り、七夕の笹飾り」については、行事としての意識が強く働いていることである。また、多くの学生の意識として、例えば「門松、餅つき、しめ縄、雑煮」を個別の行事としてではなく、正月行事としてとらえて回答していることである。同様に、「節分の豆まき、イワシの頭とひいらぎの小枝飾り、鬼の面作り」は節分行事として、「ひな飾り、菱餅、ひなあられ、おひなさま作り」は桃の節供として、「こいのぼり、ちまき、かしわ餅、かぶと作り」は端午の節供として、「七夕の笹飾り」は七夕行事として、「名月（十五夜）の飾り、名月（十五夜）の月見だんご」は中秋の名月行事としてとらえていた。

集計結果としてまとめたものは別表1に掲載しているが、年中行事体験の有無をみた場合、前述の幼稚園・こども園の実施状況の結果とほぼ同じ傾向がみられた。すなわち、正月行事、節分行事、桃の節供行事、端午の節供行事、七夕行事、中秋の名月行事が、他行事に比べて体験率が高いことである。本稿ではこれらの行事に焦点を当て、体験内容や体験相手などの項目とも関連させながら考察していくこととする。回答数が少なかった行事については、別表1を参照してほしい。

### 4.2 年中行事の体験場所についての分析

年中行事をどこで体験したかの質問については、保育所・幼稚園で、家で、地域での三つの選択肢から複数回答方式で記入してもらった。表1は、A～Fの各年中行事を体験した場所の結果をまとめたものである。a～qについては、各年中行事に関連した項目ごとの集計である。なお、行事への参加体験の内容については、アンケートの備考欄にその様子を文章で書いてもらっている。それらの記述を拾い出してみると、「見た」「作った」「食べた」「飾った」などがほとんどであった。

正月行事については、家庭での体験として雑煮は72名が回答しており、ほとんどの学生が食べている。次いでしめ縄が48名となっている。門松については43名の学生が近所で見たとして地域を選んでいる。餅つきは家での体験以外に園行事として体験している者が57名と多く、そのうち一緒に体験した相手を尋ねた質問では、地域の人の参加を44名が挙げている。園で行われる場合は、杵と臼で餅をついて食べたことが楽しい記憶として今も学生の心に残っていることがわかる。

また、保育所・幼稚園での餅つき体験は地域との交流行事として、あるいは保護者参加の行事として学生の記憶に残っていることが読み取れる。体験内容や体験相手の集計については、別表1を参照してほしい。



行事の名称	体験した場所	保育所・幼稚園で	家で	地域で
A 正月行事	(a～dの計)	98	189	118
a 門松		(19)	(28)	(43)
b 餅つき		(57)	(41)	(27)
c しめ縄		(17)	(48)	(40)
d 雑煮		(5)	(72)	(8)
B 節分行事	(e～gの計)	136	107	19
e 豆まき		(67)	(65)	(6)
f イワシの頭とひいらぎの小枝飾り		(2)	(25)	(12)
g 鬼の面作り		(67)	(17)	(1)
C 桃の節供	(h～kの計)	168	177	9
h ひな飾り		(50)	(67)	(4)
i 菱餅		(11)	(31)	(3)
j ひなあられ		(43)	(65)	(1)
k おひなさま作り		(64)	(14)	(1)
D 端午の節供	(l～oの計)	132	164	24
l こいのぼり		(57)	(36)	(18)
m ちまき		(7)	(38)	(3)
n かしわ餅		(24)	(58)	(3)
o かぶと作り		(44)	(32)	(0)
E 七夕行事(笹飾り)		69	33	21
F 中秋の名月行事	(p～qの計)	63	57	5
p 十五夜の飾り		(32)	(21)	(2)
q 十五夜の月見だんご		(31)	(36)	(3)

表1 年中行事を経験した場所 注：( ) の人数はA～Fの各行事の内数

正月行事について学生が記述した体験内容を紹介する。「園で杵と臼を使って一人ずつ代わってついた。餅を丸めてみんなで食べた。」「地域の人が幼稚園に来て一緒にお餅をついて食べた。」「祖父母の家で自動餅つき器でつき、丸めて食べた。」「公園でたき火をして、その周りでお餅をついたりつくたてのお餅を色んな味で食べたりしました。」また、雑煮については家庭での体験がほとんどであり、「家で祖母が作ってくれる雑煮を毎年食べた。」「おばあちゃんが昔からずっと白味噌で作って食べさせてもらっている。」

雑煮の作り手については、母親よりも祖母の方が学生の記憶として多く記述されており、餅つきも含めて食文化としての継承は母親よりも祖父母の役割が大きいことがうかがえる。家族の形態が多様化している現代社会では、年中行事と食文化との関係性、伝統的な食文化の継承と幼児教育との関係性についても考えさせられる課題として浮かび上がってくる。

節分行事については、表1のとおり、ほとんどの学生が家族と一緒にした豆まきや豆を食べたこと、園でも行事として豆まきをした体験を記憶している。特に園行事の場合には豆まきと鬼の面作りの体験が同数の67名であり、多くの園では節分行事として鬼の面作りと豆まきを一体化させて保育活動として

取り入れていることが読み取れる。家庭での豆まきは65名であり、学生の記述を読むと次のような例が多くみられた。「父が鬼になって豆まきをした。自分の歳の分だけ豆を食べた。」「家で恵方巻きを食べた後に豆を自分の歳の数と鬼の分の一つを足して食べた後、家の庭で豆を投げた。」「園では先生が鬼役になって、鬼に向かって豆をクラスの人と一緒にまきました。また豆を歳の数より一つ多めに食べました。」

イワシの頭とひいらぎの小枝を門や玄関に飾ることについては、表1の集計結果のとおり回答数が少ない。節分行事としての家庭・地域での継承がみられなくなっていることや、幼児期の子どもにとっては目にしている興味や関心があまりなかったためか、学生の記憶に残っていないものと考えられる。

桃の節供行事については、学生の記憶に残っているものはひな飾りとひなあられ、おひなさま作りであった。ひな飾りとひなあられは園でも家庭でも体験してきたものであるが、おひなさま作りは家庭よりも園での体験として64名の学生が記憶している。学生の記憶に残っていることとして、「お内裏様とおひな様をリビングに飾った。祖父母の家には何段もある大きなひな飾りがあった。」「姉や母とひな人形を飾った。ひな祭りの日にはあられを食べた。」「園でひな祭りの歌を歌ったり折り紙で飾りを作ったりした。」「幼稚園の製作でおひな様とお内裏様を作って飾った。」などの記述がみられた。おひな様やお内裏様作りを保育活動として位置付けることは、桃の節供行事の体験を豊かにするとともに、幼児期の体験として大人になってからも記憶に残っている年中行事であることがうかがえる。

端午の節供行事については、園行事の記憶としてこいのぼりとかぶと作りを挙げる学生が多かった。家庭での記憶としては食文化としてのかしわ餅やちまきを食べることであった。こいのぼりは昨今の住宅事情や兄弟の有無等の関係もあるが、多くの園でも節供を祝う行事として体験させている。57名の学生が記憶していることから園の事情が許せばぜひ体験させてあげたい行事の一つではないだろうか。学生が記憶している内容として、次のような記述がみられた。「先生があげてくれたこいのぼりを友達皆で園庭へ行き見ていました。」「男の兄弟がいないので、家で飾ったことはありません。こいのぼりをあげている家は、近所や地域でよく見かけました。」「園で画用紙か何かの紙でこいのぼりやかぶとを作りました。」「おじいちゃんの家へ行った時、新聞紙でかぶとを作ってくれて、それをかぶっていた。」

年中行事に関しては祖父母の存在や役割が大きいことを再認識するとともに、日常の生活において祖父母世代との関係が薄くなっている現代社会だからこそ、園でも年中行事を地域の高齢者世代との関わりをもてる機会として位置付けていくことが大切であると考ええる。

七夕行事については、園行事として記憶している学生が69名であった。家庭での行事として記憶している学生はその半数程度であった。多くの園や家庭では笹の入手が困難な状況もあり、笹飾りを実施している園では地域の協力を得るなど、様々な入手方法の工夫に努めていることが推察できる。園として家庭教育を補完する意味でも、親子で家庭に笹を持ち帰り七夕行事を子どもと共に体験する機会をつくり出していく主導的役割を果たしていくことを期待したい。

学生の記述からは、「保育で作った飾りや短冊を大きな笹に飾った。家でも父が取ってきた笹に笹飾りや短冊を作って飾った。」「母や姉と一緒に飾りを作ったり願い事を書いたりした。」「保育所で願い事を書いて、先生に手伝ってもらいながら笹に飾った。」などの体験が、具体的かつ鮮明に記憶されてい

ることがうかがえる。

中秋の名月行事については、「経験ないです。」という回答もあるなど、年中行事として記憶している学生数は半分程度であった。回答では「家でだんごを供えてススキを飾りました。」「園ではうさぎなどを製作し、だんごやススキを飾っていました。」「園でススキを取りに行ったり絵をかいたりしました。」などがみられるが、幼児期の記憶としてはあまり強く残っていないようであり、文章の記述量も少なかった。

三重県熊野市出身の学生は、「たばらして」という行事名を書いていた。「たばらして」は熊野地方では昔から伝承され、名月には子どもたちが近所の家々に置かれていたお菓子を回ってもらったそうであり、この学生には強く印象に残っていたのである。民俗学では、地域によっては「お月見どろぼう」と呼ばれる風習に分類される行事であるが、今日では教育的配慮等の様々な理由で減ってきている。

旧暦8月15日夜の十五夜は芋名月と呼ばれるが、旧暦9月13日夜は十三夜といい、豆名月とか栗名月と呼ばれる行事が全国で伝承されている。例えば『奈良市史民俗編』には、マメノメンゲツ（豆の名月）・クリノメンゲツ（栗の名月）について、次のような子どもの様子が風習として収録されている。

「菩提山では昔は子供たちが多勢寄って家々をタワッて回った。黙ってとって行っても、怒るところか『ホドコシになる』といって喜び、とりに来なかったらかえって気にした。中畑でもたくさんで連れになってタワリに歩き、『タワッて貰うたらよい』としていたという<sup>2)</sup>。」（筆者注：奈良の方言に「たばる」という言葉があり、神仏に供えた物を下げる行為を意味している。同書では民俗調査採訪者が話者の「たわる」と表現した言葉をそのまま記録している。）

学生への実態調査では、奈良市在住の学生はだれもこうした行為を書いている例はみられなかった。行事自体が行われていなかったり伝承されていなかったりするなど、伝承地域が偏在しているものとみられる。名月での子どもたちの行為が受容された背景として、同書では「子供たちが、祭られる神の代理者をつとめた時代の興味ある残存である。」との民俗学からみた見解が述べられている。今では中秋の名月を愛でる行事としてとらえられがちだが、秋の季節の行事であることを考え合わせれば、先人たちにとっては芋や豆など畑の収穫物に対する感謝の気持ちが込められていたことが推察できる。一方、「たばらして」を記憶していた学生も、当時は行事の意味付けとは無縁であっただろうし、この日だけは家々の供え物を黙ってもらっていても許される行為として素直に楽しんでいただけたかもしれない。

伝承的な行事や個々の行為をみれば、科学的でない要素を含みつつ昔から行われてきた風習として伝承されているものや、迷信やまじないの類も少なくない。現代社会において、科学的に説明できないものは生活上・教育上価値がないと言われればそれまでだが、幼児期の子どもにとって月にはウサギが住んでいるなどの話は夢物語として保育者が語って聞かせてもよいのではないかと思う。今日では、こうした考え方は少数意見として通用しないかもしれないが、クリスマスのサンタクロース同様に、夢として信じられることが幼児期の子どもの特権であると考えたい。名月行事を取り上げた保育を一つの機会として、園において絵本やお話を通じて幼児たちの夢を育む保育を展開していくことが、幼児期の子どもたちの情緒を豊かにしていく上でも意味があるのではないだろうか。

盆踊り・夏祭り・秋祭りについては、学生は地域行事・お宮さんの祭礼行事として記憶している。盆踊りの記憶が最も多いが44名にとどまり、夏祭りや秋祭りはそれぞれ30名程度であった。こうした地域



や社寺で行われている行事は今日でも続けられている場合がほとんどであろうが、学生の記述からは詳しく思い出として書いている者と空欄の者との二極化がみられた。記述された内容では次のような例がみられ、極めて地域性の強い伝統行事であることがうかがえる。

「獅子舞が毎年10月の中旬頃に秋祭りとして行われています。お菓子やお餅がもらえるので、友達や家族と一緒に獅子舞の様子を見てお菓子をもらいました。」「地域の小学生までの子どもやその保護者たちが集まって、町内をみこしを引きながら回った。」「みこしに太鼓を乗せた太鼓台があり、みこしをお酒で酔ったおじさんがかつぐ。その祭りに参加していた。」

一方、学生にとって思い出の強い行事として回答した中には、園行事として実施されていた「クリスマス会」「お誕生日会」「芋掘り」「遠足」「夕涼み会」などがみられる。幼児期の子どもにとってはクリスマス会が特に印象深かったようであり、14名の学生が挙げている。詳細は別表2を参照してほしい。

### 4.3 年中行事の思い出と保育との関係についての分析

質問の観点(5)「現在の自分の心に強く残っている年中行事」と観点(6)「保育者として子どもたちに体験させたいと考えている年中行事」との関係を見るため、次の三つの視点からの分析を試みた。

#### 4.3.1 視点1…学生の行事印象度と保育導入意欲度との関係

第一の視点として、観点(5)と観点(6)の回答を集計した別表2をもとに、思い出の強い行事と子どもたちに体験させたい行事別に、それぞれ第1位から第3位までを順に3点・2点・1点と軽重を付け、人数分を掛けて集計した。図1は行事全体の分布傾向をみるため、横軸に観点(5)を行事印象度として、縦軸に観点(6)を保育導入意欲度としてドットで表したグラフである。右上にある年中行事ほど思い出として強く印象に残り、保育でも子どもたちに体験させたいと考えていると読み取ることができる。主な年中行事については図中に名称を表した。

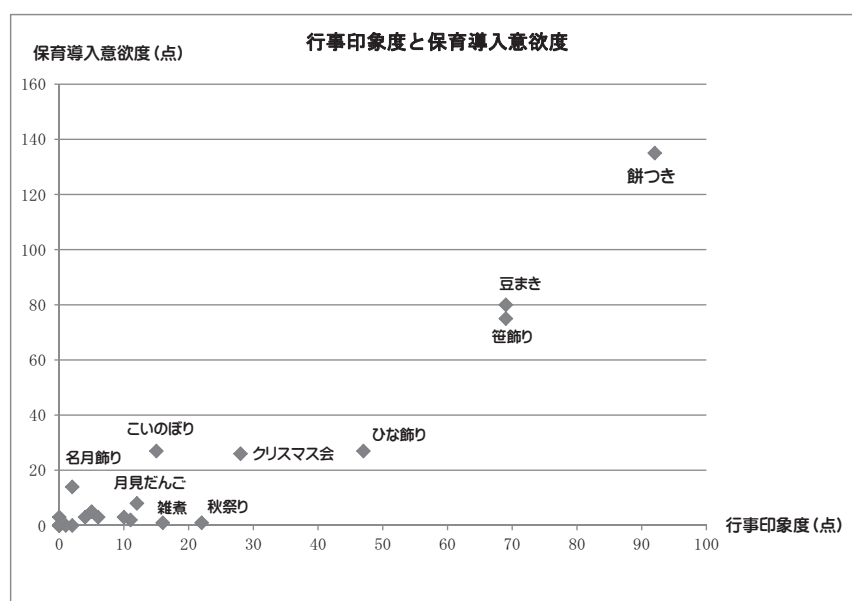


図1 行事印象度と保育導入意欲度

図1のグラフから個々の行事別にみると、正月行事の餅つきに回答が集中し、行事印象度が92点、保育導入意欲度が135点と共に最高点となった。また全体的な分布状況をみると、行事印象度と保育導入意欲度が共に高いものから第1グループとして正月行事の餅つき、第2グループとして節分行事の豆まき、七夕行事の笹飾り、第3グループとして桃の節供のひな飾り、端午の節供のこいのぼりのほか、点数の高かったクリスマス会も含めた。第4グループとして行事印象度よりも保育導入意欲度が高い行事として、名月行事のススキの飾りを位置付けた。第5グループには保育導入意欲度よりも行事印象度が高い行事として、秋祭りや正月の雑煮、中秋の名月の月見だんごを含めた。また図中には名称を表していないが、第6グループとして幼児期の体験として強く心に残っているものの、園行事として認識されていないものに盆踊り、夏祭りが地域の伝統行事として挙げられる。そのほか図中では0点近くに位置し、園でも家庭でもあまり体験しておらず記憶にも残っていないものとして、門松、節分のイワシの頭とひいらぎの小枝飾りがみられる。また、菱餅、ちまき、かしわ餅、冬至のカボチャなどは、各行事における食文化の記憶としても考えられるが、学生にとって行事印象度と保育導入意欲度は共に低い。

このように行事自体を6グループに分けて全体的な傾向を読み取ると、おおむね第1グループから第3グループまでの年中行事を保育との関連でとらえていけばよいのではないだろうか。これら3グループの行事は、学生たちにとって自分が幼児期に体験していることから積極的に導入したい、あるいは体験していないから逆に子どもたちに体験させたいと願っているものと考えられる。学生自身が年中行事を保育に取り入れていく際に、幼児期の個人的体験が潜在意識として残っており、それらが顕在化されていくことによって保育への導入価値を行事ごとに判断していくことができるようになるのではないだろうか。

なお、クリスマス会については、民俗学からみると我が国の伝承的な年中行事には含まれないが、幼児教育の考え方では昭和23年の保育要領にも園行事として取り上げられている。今日では社会的にみても年中行事として定着しており、行事のもつイベント的雰囲気や非日常的な楽しさの要素が含まれていることからみても、学生の記憶に強く残っていることは決して不自然なことではない。

実態調査に書かれていた第1または第2グループの行事を挙げた学生の観点(5)及び観点(6)についての記述を抜粋して引用する（注：以下、クラスと学生名をイニシャルで表記する）。

「観点(5)：自分がついたお餅を食べたり、豆を歳の数だけ食べたりしたので、より印象に残っている。七夕には願い事を書いて飾り付けをしたりしていたので今でも覚えている。／観点(6)：子どもたちが主役となって楽しめるものが良いと思いました。家族も参加してくれたり、地域の方とも交流ができたことで自分自身も印象に残っているので選びました。 2A T.Y」

「観点(5)：年中行事としてとても印象が強く、いろいろ作ったりするものに対して楽しかった思い出があります。七夕は飾りや短冊を書くというのが楽しかったし、餅つきでもつかせてもらい、こねるということもして1年に1回しかないので楽しみでした。／観点(6)：この三つの行事は私が幼稚園児だったころにとっても印象に残った行事です。私が20歳になってもその時の記憶があり、楽しかった出来事なので子どもたちにも経験させてあげたいです。 2B M.Y」

#### 4. 3. 2 視点2…学生の保育導入意欲と現在の園での実施状況との関係

第二の視点として、学生が保育に取り入れたいと考えている保育導入意欲の高い行事と、奈良県国公立幼稚園・こども園で園行事として実施されている行事との関係を分析した。学生は別表2のとおり子どもたちに体験させたいと考えている年中行事を三つ選択している。図2のグラフでは、保育導入意欲度として各行事について、順位に関係なく何人の学生が選択しているかの人数を学生数全体（77名）に対する割合で表した。幼稚園・こども園の実施状況割合については、紀要第46号での調査回答数を引用したため園の全体数は118園である。

学生の保育導入意欲の高い年中行事のうち、正月行事の餅つき、七夕行事の笹飾り、節分行事の豆まきは、現在でも70%以上の幼稚園・こども園で実施されており、半数以上の学生が幼児期に体験した記憶として残っている。また、桃の節供行事のひな飾りや端午の節供行事のこいのぼりは、約60%の園で取り組まれているにもかかわらず、学生の保育導入意欲は約20%と低い。これは、幼児期の体験が見た記憶にとどまっていたのではないかと考えられる。年中行事と関わりの深いひなあられ、かしわ餅、ちまき、月見だんごについては、約30%から40%強の幼稚園・こども園で行事の一環として体験させているものの、学生の保育導入意欲は極めて低い。この点について、年中行事と関わる食文化の伝承面からみると、飽食の時代といわれる今日では日常の食生活が変化してきたことが背景にあり、伝承すべき対象とは考えていないのではないかと推察される。一方、園長へのアンケート調査では対象外であったクリスマス会は、学生の記憶として強く印象に残っているものの、保育導入意欲は約10%の学生にとどまっている。

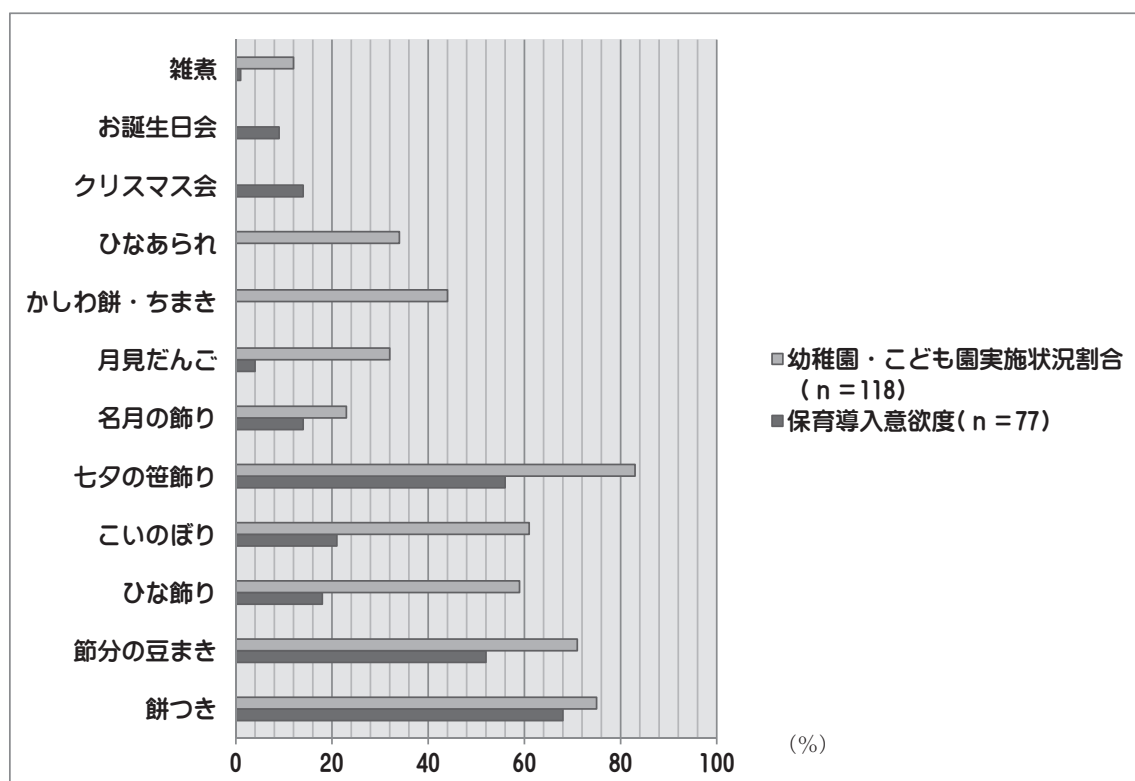


図2 年中行事の幼稚園・こども園実施状況割合と学生の保育導入意欲度

#### 4. 3. 3 視点3…学生の行事印象度と保育導入意欲度との関係

第三の視点として、学生個人からみた行事体験の印象度と保育への導入意欲度の一致状況を分析した。観点(5)と観点(6)の質問で選択した三つの年中行事について、順位に関係なく3行事内に含まれている場合を一致とみなし、いくつの行事が一致しているかの状況別の人数を集計しグラフに表した。図3のグラフから、1行事以上の一致者の占める割合は全体の88%となり、うち1行事の44%が最も多く、次いで2行事の39%であった。90%近くの学生は自分の幼児期の体験を通して年中行事を実感しており、自分の体験をもとに保育に取り入れることに対して抵抗感を感じていない。また自分の年中行事体験の記憶から、子どもたちにも体験させてやりたいとの願いにもつながっていると考えられる。

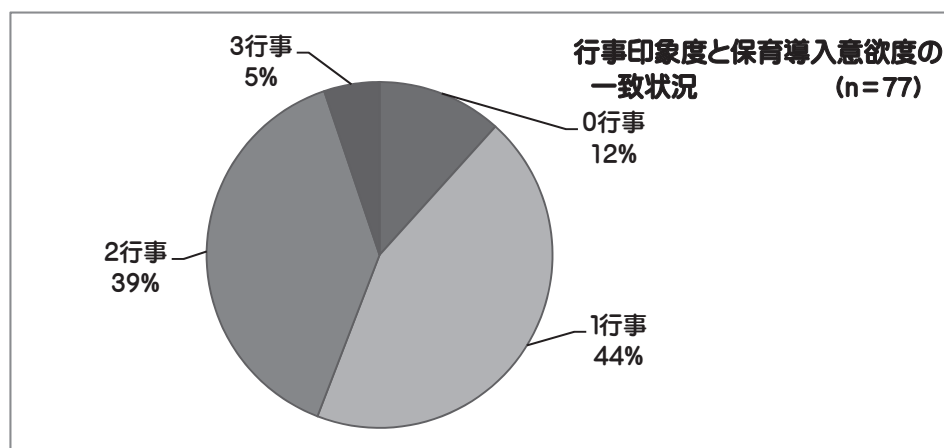


図3 行事印象度と保育導入意欲度の一致状況

教職実践演習の授業の中で行った実態調査は、学生たちに改めて年中行事に対する関心呼び起こし、その由来や意味等についての理解や保育との関係を再認識させることができたものと考えられる。

筆者らが仮説に立てた「学生自身に幼児期の年中行事体験の意識を顕在化させること」の評価はできても、「保育者としての資質向上につながる」ことの検証については、在学中に結果を出すことができない。そのため調査に協力してくれた学生たちには、保育者として就職してから保育の中に適切に年中行事を取り入れ、その成果を自己評価してほしいことを話した。

現在多くの保育現場で行われている割合の高い年中行事については、保育者を目指す者にとって基本的な知識を身に付けておく必要がある。その上で年中行事をはじめとした伝承的な民俗文化に対する深い関心をもつことが、保育者の資質向上の面からも大切であると考えている。保育現場では様々な年中行事に触れる体験を工夫しながら取り入れている。その一例を紹介すると、大和郡山市立郡山北幼稚園では平成27年12月14日に親子一緒にしめ縄作り体験が行われた。わらに触れる体験、わらをより合わせる体験、編んでいく体験、しめ縄に飾りを付ける体験など、園児たちにとっては初めての体験であったことだろう。幼稚園単独では実現しにくい年中行事の体験は、園長の企画力や地域の方々の協力はもとより保育者全員の幼児の成長への願いを背景とした深い共通理解が必要となる。図4の写真は、同園の熊井祥子園長（平成27年度）から提供を受け、本稿への掲載許可を得たものである。





図4 大和郡山市立郡山北幼稚園でのしめ縄作り体験（平成27年12月14日撮影）

#### 4.4 年中行事を授業内容に取り入れた試みと検証

研究仮説の「大学の科目内容の中に年中行事を適切に取り入れていくことが、学生自身に年中行事と保育の在り方について考えていくきっかけとなり、保育者として保育の中に取り入れようとする意欲の醸成につながるのではないか。」について検証するため、平成27年度調査の対象学生とは一致していないが、ほぼ同様の幼児期の年中行事体験をしてきていると考えられることから、平成28年度「子ども学ゼミ（年中行事）」で検証に取り組んだ。本ゼミは年中行事をテーマに通年授業として実施され、参加学生は11名である。科目の概要についてシラバス<sup>3)</sup>から紹介する。

「保育所・幼稚園で行われている年中行事の中で、我が国の伝統や文化を継承しているものに注目し、文献等でその由来や伝承されてきた意味等について調べる。また、保育現場で活用することを目的として幼児にわかりやすく伝えることができる教材作成に取り組み、実践を通して幼児の興味関心のありようなど教育的効果を探る。」

また、本ゼミの履修を通して獲得を目指す力は、次のア～エのとおりである。（ ）内はディプロマポリシーの観点を示している。

- ア 伝承されてきた年中行事について知り、由来や伝承されてきた意味を理解する。（知識・理解）
- イ 子どもの発達を理解した教材の作成に興味関心をもち、子どもが理解しやすいような表現が工夫できる。（技能・表現）
- ウ 自作の作品を保育教材として子どもたちに提示し、保育現場における年中行事の伝承について考えることができる。（思考・判断）
- エ 探求心をもって教材作成に臨み、保育者としての資質向上に努めようとしている。（関心・意欲・態度）

本ゼミを選択した動機について、学生が平成28年4月21日に書いた内容を一部紹介する。

「年中行事がなぜ伝承されてきたかについて知り、由来や伝承されてきた意味を理解することを深めたいと思った。その理由は、月ごとに何の行事があるのか調べた時に、何月に何の行事があるのかは知っているけれど、その行事の由来や伝承されてきた意味を全く知らないということに気付いたからです。また、このまま何も知らずに保育者になって、子どもに行事について聞かれた時に何も答えられなくて、その行事に込められた意味などを子どもに伝えられないのは嫌だと思いました。昔から伝えられてきたことを大切にして、行事一つ一つの意味をしっかりと理解して、子どもたち

にも伝えられる保育者になりたいと思いました。昔から伝えられてきた行事は、現代の私たちの生活にはあまり関係のないものがあって、知らないことが多いので、大人でも理解しにくいと感じ、それを子どもに伝えることは、とても難しそうだなとも思いました。子どもに伝えるためには、子どもが理解しやすいような表現ができるようになる必要があると思いました。 3D S.N」

「実習の時に『先生、豆まきってなんであるの』など、いろいろと聞かれてとても困ったことがあり、もし年中行事についていろいろと理解していたら、子どもたちに胸をはって言えると思ったので由来や意味を深めたいと思いました。 3D Y.R」

11名の学生が思っている内容には、次のような共通した点がみられた。

第一に、自分自身が年中行事の由来や意味について、漠然とした知識しかもっていないこと。

第二に、保育の引き出しを増やす上で、年中行事は知っておくべき価値があると認識していること。

第三に、年中行事ゼミを選択する際の判断材料として、自分の幼児期の体験を結び付けていないこと。

これらのことから特に第三の内容に関して、通年にわたるゼミ活動を通して自分の幼児期の体験がゼミ活動に生かせることに気付かせること、将来の保育者として年中行事への理解を深めることは有用な価値ある学びであると認識させることを、指導上の留意点として考えた。

ゼミ活動では、前期期間中に全員が保育教材として準備できるものの製作に取り組んだ。学生たちは、保育所や幼稚園訪問の時期を考えて7月の七夕行事を選んだ。七夕行事は、学生全員が幼児期の体験を記憶しており、6月の保育所実習でも体験してきている。ゼミでは、大学に近い保育園と幼稚園へ演習として訪問することを目標にして保育教材の製作に取り組んだ。学生たちはそれぞれ七夕行事について調べ、どのようなことを子どもたちに伝えたいかを考えた。準備した教材と伝えたいねらいは、次のとおりであった。

- 七夕飾り…いろいろな種類の飾りを作り、飾りの名前や意味を伝えたい。
- 紙芝居…なぜ織姫と彦星が離れ離れになったのかを話の中心として組み立て、好きなことばかりを  
してはいけないことを知らせたい。
- 自作絵本…七夕の夜に星が降りてきて、短冊に願い事を書くときに叶うというファンタジーな物語に仕上げて、子どもたちに興味をもって夜の星空を見てイメージを広げてほしい。
- 素話…自分が体験してきたことを織り交ぜながら、子どもたちと七夕の会話を楽しみたい。
- ブラックシアター…ブラックライトが夜の幻想的なイメージにぴったりで、自分たちの身近なところにもきれいな世界があることに目を向けて、感性豊かになってほしい。
- ペープサート…七夕の話を視覚に訴えて見やすくするため、登場人物を大きなペープサートにした。  
登場人物の気持ちを身近に感じながら、真面目に働く大切さも知ってほしい。

自分が訪問先の園で使う教材の製作活動では、自分の幼児期の体験を出し合いながら取り組んだ。出された主な体験では、短冊に自分の願い事を書いて飾ったこと、願いが叶うと本気で思っていたこと、保育園で先生に七夕の絵本を読んでもらったこと、笹飾りを作って近くの老人ホームに持って行ったことなどであった。また印象に残っていることと言えば、織姫と彦星が1年に一度会えることや天の川があることぐらいだと言う。

本研究では一人の学生K.Mを抽出し、ゼミ活動の過程で年中行事に対する意識の変容や保育との関

係についての問題意識の広がりや深まりをみていくこととした。七夕飾りを選択したK.Mは、由来を調べる中で竹に五色の糸を飾っていたのが笹に五色の短冊を飾るように変化していったことや、短冊に書く願いの内容は稽古事としての機織りや手芸、書道の上達などであったことを知り、単なる飾りとしての役割ではなく、それぞれに深い意味があったことに驚いていた。

製作活動での会話を通して、K.Mをはじめほとんどの学生は、今の自分が七夕の何を知っているかと自問するとわからないことが多いことにも気付いていった。例えば、なぜ7月7日なのか、なぜ笹の葉に飾り付けをするのか、なぜ飾りの形は決まっているのかなどである。また、子どもの頃から歌っていて今も覚えている歌詞に出てくる言葉も、改めて考えれば説明できないと言う。例えば、なぜ短冊は五色と色が決まっているのか、軒端とは家のどこのことか、金銀砂子とは何のことかなどである。これらのことから幼児期から記憶しているほかの童謡でも、歌詞をじっくり考えれば意味不明なものもたくさんあるのではないかと話題が広がっていった。指導者からみれば学生たちがあまりにも知らなさすぎるという実態よりも、七夕への疑問をきっかけに年中行事に対する幅広い関心が生まれ、調べようとする意欲の高まりにつながっていったことを評価したいと考えている。

製作活動の振り返りでは、12種類の七夕飾りの製作に取り組んだK.Mは次のように書いていた。

「自分自身が飾りの意味を調べて製作することで、保育園・幼稚園でも子どもたちが飾りを作る際には意味を知らせて作ることが大事であり、行事に一層興味をもたせることにつながると思った。子どもたちには、たとえ一つでも意味を知って飾りを作ってほしい。単なる行事の飾り作りに終わることのないようにしたい。保護者の中にも飾りの意味を知らない人がいると思うから、子どもたちが知って反対に伝えることも今は大事だと思った。」

ゼミでは、6月30日に学研奈良ピュア保育園を、7月5日に奈良学園幼稚園を訪問した。図5の写真は、奈良学園幼稚園での演習の様子である。



図5 奈良学園幼稚園での演習（写真左から七夕飾り、紙芝居、自作絵本：平成28年7月5日撮影）

子どもたちの前で自分のテーマに取り組んだK.Mの振り返りには、次のように書かれていた。

「子どもたちは七夕飾りの意味をほとんど知らないことがわかった。演習を終えて、さらに私自身知らなかったスイカやナスが豊作を願うこと、笹に飾る意味は邪気を払うこと、笹が水田の害虫を防ぐために使われたこと、笹の葉が船の形に似ていて願い事を乗せて運ぶことなどを、子どもたちにわかるように知らせたいと思った。自分で作った飾りを見せ、最初は意味を知らせながら進めたが、途中から飾りを見せながら質問すると、自分なりに考えた意味や知っていること、イメージしたこ



とを積極的に発言してくれた。例えば、提灯を見せると『明るくするものや。』とつぶやき、私が『そうだね。みんなの心を明るく照らすんだよ。』と言うと、『そうなんだ。』と頷いてくれた。織姫と彦星を見せると『二人いるから仲良くしないとあかんね。』と、自分なりの意味付けを言ってくれた。短冊を見せながら、『願い事が叶うだけでなく、昔の人は字がきれいに書けるようにと願って書いたんだよ。』と話すと、特に子どもたちの反応が大きかった。』

保育園や幼稚園を訪問して子どもたちと触れ合った体験を互いに出し合う中で、学生たちに共通した感想は、「短冊に願いを書くと叶うということは、子どもにとって夢がある。だから短冊に興味を示す子どもたちが多かったのだろう。」であった。K.Mにとっても、子どもが夢をもつ場としての七夕行事は教育的にも意味のある体験であり、そのことが今も園行事として受け継がれていることに納得できたようである。

七夕行事について自分が知らなかったことを調べてわかると、子どもたちに知らせたいという欲求が高まり、一方的な保育になりがちであるが、K.Mは七夕行事にまつわる話を知らせたいという気持ちを抑えながら、子どもたちとの会話を大切に、子どもたちにわかるような説明の仕方を考えて進めていくことができていた。

K.Mの保育演習を参観してくれた幼稚園の先生からは、次のような感想を寄せてくれた。

「今回、七夕の話をしていただくとともに、様々な飾りを作って持って来て下さり、見て楽しむことができました。飾りの名前までクイズのようにして答えさせてもらえるなど、子どもたちもすごく興味をもつことができたと思います。子どもたちは学生さんが帰った後も、飾りの名前を言い合っていました。私自身も初めて見る飾りや名称もあったので参考になりました。」

また、本ゼミの活動に対する意見を求めたところ、次のように書いてくれている。

「たくさんの年中行事がありますが、その行事に関することを研究されており、将来保育者として子どもたちに伝えていくことができると思うので、すごく良い取り組みだと思います。」

子ども学ゼミ以外の授業では、平成27年度保育内容演習(環境)の時間に、七夕行事を題材にした保育環境として笹飾りを作っている。また平成28年度保育表現技術(造形表現)の授業では、端午の節供の時期に合わせてビニルを用いた手作りこいのぼりや新聞紙を材料にしたかぶと作りに取り組んでいる。でき上がった作品は、本学の階段スペースや2階廊下の壁面に展示し、幼児教育学科にふさわしい環境を作り出すとともに、季節感も味わわせてくれている。図6の写真は、七夕行事での笹飾りと端午の節供行事のために製作したこいのぼりの展示、かぶとの壁面掲示の様子である。

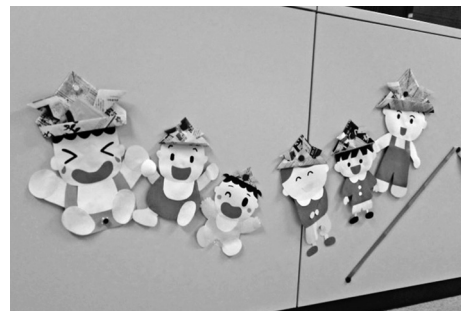


図6 学生の製作による笹飾り、こいのぼり、かぶと（平成27年7月・平成28年4月撮影）



## 5. 考察

### 5. 1 研究仮説(1)について

研究仮説(1)については、平成27年度教職実践演習で実施した実態調査の中で年中行事を幼児期の子どもたちに保育活動・保育内容として体験させることについての考えを質問している。回答では学生のほとんどが肯定的評価をしており、そのうちから自分の体験を強く意識し、理由等をはっきり述べている意見をもとに考察する。

「私が小さい時、他の人と比べてあまり日本伝統の年中行事や関連する遊びをする機会が少なかった  
ので、今回のアンケートを見て知らなかったものが多く、思い出などもあまり記憶に残っていません  
でした。もっと幼い頃にたくさんのことに参加できていたら良かったなと思ったので、幼児期の  
子どもたちに保育活動・保育内容として経験させることはとても良いことだと思います。時代が進  
むにつれて新しいものばかりに興味がいってしまい、せっかくの日本伝統の行事等がだんだんと忘  
れられていくのは勿体ないので、知っている人がいる限り子どもたちに保育の一環として教えてい  
き一緒に遊び楽しみながら学んでいける環境をつくっていくことが大事なのではないかと考えまし  
た。 2B Y. Y」

「保育として年中行事を経験させることはとっても大切だと思います。私が幼稚園の時には正月には  
餅つきをしたり、夏には外でスイカを食べたり、秋には園で育てたサツマイモを園庭で焼き芋にし  
て食べたりと、たくさんのことを経験してきました。今ではそのほとんどが行われていません。昔  
は幼稚園で行わなくても各家庭で季節を意識した食べ物や行事、遊びをしていたと思います。しか  
し、現代では親が共に働きに出ていたりしており、毎日が仕事、子育てと忙しく生活をしている家  
庭が多くなっています。その中で、こういった行事を意識することは難しいと思います。幼稚園や  
保育園でもこういった行事はしないし、家庭でもしないとなると、子どもは全く触れることのでき  
ない世界になっていくと思います。家庭でできないぶん、保育で取り入れていき、子どもに意識し  
てもらい、家庭で子どもが話をするなどして、親にも意識してもらえるようにできたらと思いま  
す。 3C N.A」

「幼児期に楽しんだ行事のことは今でもよく覚えているし、古くから続く行事やその由来について初  
めて知る大切な機会になるので、よいことだと思う。また、行事の際は、幼児の保護者や地域の方  
が協力しているところを実習先でよく見た。地域と園、家庭と園とをつなぐ大切な機会にも行事は  
なる。そういった意味でも大切だと思う。 3C F.H」

「家庭によっては、それぞれの行事を経験できないことはたくさんあると思う。例えば、男の子ばか  
りの家だとひな飾りがなかったり、女の子ばかりの家だとこいのぼりがなかったり、他にも行事に  
あまり関心がない家庭があったりすると思う。でも、それを園で経験することで子どもは様々な経  
験ができたり毎年の楽しみとなったりすると思う。また、その楽しみが“園に行きたい”“園が大  
好き”という気持ちにもつながり、子どもの前向きさや意欲を引き出せたりすると思う。私自身  
“明日、給食で月見だんごが出る！”や“明日、川におひな様を流しに行ける！”等、様々な楽し  
みがあったように思う。実習の時にも帰りの会で先生が知らせて、子どもたちが喜んでいる様子が

見られたので、保育の中で経験できることは、子どもにとって楽しみであり、これからの糧になると思う。 3D Y.A」

このように筆者らの考えを真剣に受け止めてくれている学生が少なからずいたことによって、保育者を目指す学生が年中行事と向き合って保育の質を豊かにしていける可能性に手応えを感じている。前掲の4名の学生たちの意見を読み取りながら、年中行事を保育に取り入れる価値について、次の7点にまとめた。

- ① 次世代に受け継がれるべき我が国の民俗文化として、年中行事は大切にしていける価値があること。
- ② 年中行事には季節を意識した食べ物や遊びが関係している場合が多く、幼児期の文化体験としての総合的な価値を見いだすことができること。
- ③ 年中行事に対して、子どもなりに期待感をもつことが心の成長にとって有意義であること。
- ④ 幼児期の年中行事体験は、大人になってからも快い記憶として残っていること。
- ⑤ 年中行事には家庭生活と子どもの育ちの関係を見つめ直すきっかけが含まれていること。
- ⑥ 家庭生活の中では十分にできにくい年中行事体験を幼稚園・こども園・保育所が補完できること。
- ⑦ 年中行事は幼稚園・こども園・保育所と家庭・地域とのつながりをつくる機会となっていること。

このように年中行事を保育に取り入れる価値について一定の評価ができるとしても、行事にみられる種々の行為を体験させることだけにとどまっていはいけない。大切なことは、幼児期の子どもの心に快い記憶としてどのように残していくことがよいのかという点を考えることである。前述したように、年中行事でみられる個々の行為には、見方によって科学的とは言えない要素も含まれている。例えば、節分行事では豆をまいて鬼を追い払うことや豆を歳の数だけ食べること、七夕行事では短冊に願いごとを書く行為などが挙げられる。保育者は、こうした行為に対して科学的であるかどうかだけで判断するのではなく、昔から人々のささやかな願いが込められたハレの日の特別なふるまいとして理解した上で、子どもたちにどのように話をしていくかについて考えていくことが大切である。

七夕行事を教育的観点からみた場合、短冊に自分の願いごとを書く体験は、子どもたちにとってよりよく生きたいと願う存在であることに自ら気付いていくことにもつながる。すなわち幼児期にふさわしい心の教育としても位置付けられるのではないだろうか。また、保育者としての資質向上の観点からは、将来保育者となって自らの年中行事体験を生かした保育を実践することによって、年中行事のもっている文化的価値を再認識でき、我が国の文化や伝統の継承に寄与していることの意識化にもつながると考えられる。

## 5.2 研究仮説(2)について

研究仮説(2)を踏まえながら、ゼミ活動に取り組む過程で学生の年中行事に対する意識がどのように変容していったかについて考察する。

七夕行事を選択し決定するまでの場面では、K.Mをはじめ学生全員が年中行事について漠然とした知識しかもっていなかったことに気付くとともに、子どもたちが年中行事を家庭で経験することが少なくなっている実態から、年中行事を保育内容として子どもたちに伝えることの必要性も感じていた。

教材作成の場面では、文献等から情報収集して新たに得た知識や再認識した事柄の整理、学生同士で

の情報交換や話し合いを重ねながら、一人一人が教材作成に取り組んだ。話し合いを進める中では、七夕行事に関してはそれぞれ幼児期の体験に差があるとしても、小学校以降も何らかの形で目に触れてきたことの印象などを語り、幼児期の体験と重ね合わせて個々に思い起こしができた。その上で、年齢に応じた保育の在り方を探るという視点から、子どもたちに何を伝えたいのか、どのような教材を作成すればより興味をもってくれるのか、自分の体験をいかに織り込んでいくかなど、子どもたちの心に深く刻まれていくための内容構成や話し方等の工夫に考えを巡らせ、保育への導入意欲を高めていった。

保育園と幼稚園での演習の場面では、子どもの想像力や興味を引き出す話し方や、話しながら子どもたちの思いや反応を受け止める心の余裕が求められることを実感した。学生の一人は、「単に七夕行事の内容等を伝えるだけでなく、初めて出会う子どもたちに対して『お姉さんもみんなのように短冊に願い事を書いたんだよ。』という自分の体験を話したことで、子どもは一層興味を示してくれた。子どもたちを少し近く感じることができた。」と振り返っている。自分の体験を生かしながら七夕の話を子どもたちの心に届けたいという強い願いは、意欲的な教材作成の原動力となり、演習でも子どもたちの反応を間近に体感できたことにより達成感を味わえたようである。保育園と幼稚園での演習を通して、学生たちは問題意識をもって保育教材を研究することの意味や大切さにも気付くことができ、貴重な保育経験となった。

年中行事のいくつかは、多くの園で保育計画の中に位置付けられ、毎年繰り返し実施されている。子どもたちにとっては、通常の保育にはみられない特別な雰囲気や文化を感じることのできる貴重な機会となっている。子どもたちは、保育者から行事にまつわる話を聞いたり友達と一緒に体験したりすることで、想像をめぐらしながら楽しさや感動を心に留めていく。このことが、年中行事を保育に取り入れる魅力の一つになっているのではないだろうか。

後期のゼミ活動では、学生たちは秋の季節行事として月見のほか通過儀礼の七五三も対象とし、冬から春の季節行事として七草がゆ、節分、桃の節供の教材研究に取り組み、それらの成果をもって再び保育園と幼稚園を訪問し、子どもたちと交流する計画を立てている。例えば月見行事では、幼児期の体験に加え実際に自分たちで月見団子を作って食べるなど、その体験も話題として子どもたちの心に届けたいと考えており、自分の体験を生かそうとする意識が育ってきている。同時に、保育者として年中行事を子どもたちに伝えることのできる力量を身に付けていく必要があることも自覚し始めている。

## 6. まとめ

本学の教育理念は、建学の精神に基づいて次のように述べられている。

「本学は、時代の進展に対応しうる広い視野と高い識見を培う基礎教育を重視するとともに、各専門分野に必要な学識と実務上の技能を高め、実社会に貢献できる女性を育成する。特に、文化財に恵まれた歴史的風土と緑に囲まれた環境を活かし、日本文化の原点である奈良文化を基盤として教養を深め、心身ともに健やかで豊かな人間性の涵養につとめる<sup>4)</sup>。」（注：下線は筆者による。）

年中行事は、民俗文化として位置付けられ今日まで伝承されてきたものであり、前述の教育理念にみ

られる「文化財」や「日本文化」、「奈良文化」の言葉の中には、民俗文化の価値や重要性も含まれていると考えている。また、平成28年度のディプロマポリシーに照らすと、学生が授業を通して獲得を目指す力について保育者としてだけでなく社会人として身に付けておくべき教養として、[知識・理解]では、「① 社会人として必要な教養を修得している。」が該当する。その下位項目として「a 社会人として望ましい社会的規範や礼節などについての社会常識を身に付けている。」、「b 社会人として文化、自然、科学などに関する幅広い知識を身に付けている<sup>5)</sup>。」が挙げられている。

若い保育者が年中行事の由来を十分理解していないといった前述の園長の指摘は、現代社会ではほとんどの人に当てはまることであり、社会人としての次元でも語られるべき課題である。そのことを踏まえた上で学生に対する指導を考えていく必要がある。さらには幼稚園教育要領でも園行事は教育的価値のあるものとして認められており、幼稚園が行う行事の中には年中行事も含まれているとの認識に立って、大学の授業において年中行事や伝承的な遊びを教材として積極的に取り入れ、シラバスに位置付けていくことが大切であると考え。この点については、幼稚園に限らず保育所・こども園における保育の在り方についても同様の認識をもつ必要がある。保育所保育指針解説書では[第4章 保育の計画及び評価]の「オ 家庭及び地域社会との連携」の中で、次のように説明している。該当部分のみ抜粋する。

「日常生活において、子どもたちは、地域の自然に接したり、異年齢の子どもをはじめとする幅広い世代の人々と交流したり、社会の様々な文化や伝統に触れたりする直接的な体験が不足しがちとなっています。保育所ではこれらのことを十分に踏まえて、保育所内外において子どもが豊かな体験を得る機会を積極的に設けることが必要です<sup>6)</sup>。」

授業での実態調査結果やゼミ活動でも明らかのように、年中行事や伝承的な遊びについての由来や内容、意味等についての知識の獲得や教材作成に取り組ませるだけでなく、学生自身が幼児期に体験してきていることを価値あるものとして再認識させていくことが、保育者としての資質向上にもつながっていくものと考えられる。

## 7. 謝辞

本研究に当たり、実態調査に協力してくれた本学の平成27年度卒業の学生諸君、平成28年度子ども学（年中行事）ゼミの学生諸君、ゼミ活動を受け入れ写真撮影も許可していただいた学研奈良ピュア保育園長岡田久代氏、奈良学園幼稚園長西田明恵氏、写真提供及び掲載許可をいただいた大和郡山市立郡山北幼稚園長熊井祥子氏（平成27年度）、同園長野長瀬麻夜氏（平成28年度）に心から感謝申し上げます。



## 引用文献

- 1) 恒岡宗司（2015）幼稚園における「年中行事」の取扱いに関する一考察．奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要46：33-53.
- 2) 奈良市史編集審議会（1971）奈良市史民俗編：244－245．吉川弘文館．
- 3) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部（2016）平成28年度授業科目内容〔シラバス〕：170－171.
- 4) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部（2016）Campus Guide 2016：30.
- 5) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部（2016）平成28年度授業科目内容〔シラバス〕：1.
- 6) 厚生労働省（2011）保育所保育指針解説書：147．フレーベル館．

別表 1

## 実態調査集計結果

（単位：人）  
（複数回答方式による単純集計）

年中行事の名称・ 関連する伝統的な 遊びの名称	どこで体験したか			どんなふうに体験したか			体験相手		
	保育所・幼稚園で	家で	地域で	自分の遊び・見たこと食べたこと等として	園での行事や遊びとして	地域の行事に参加して	友達と	家族と	地域のひと
門松	19	28	43	44	13	14	14	35	16
餅つき	57	41	27	47	55	28	45	52	44
しめ縄	17	48	40	45	17	20	16	50	21
雑煮	5	72	8	58	8	8	8	68	8
七草がゆ	4	42	3	34	6	2	6	41	4
トンド	2	6	17	8	2	18	3	18	15
節分の豆まき	67	65	6	60	65	5	64	64	7
イワシの頭とひいらぎの小枝飾り	2	25	12	26	4	4	3	27	4
鬼の面作り	67	17	1	27	65	1	62	15	1
ひな飾り	50	67	4	57	51	3	42	60	3
菱餅	11	31	3	34	9	1	8	31	3
ひなあられ	43	65	1	55	45	1	43	64	1
おひなさま作り	64	14	1	22	60	2	60	10	2
こいのぼり	57	36	18	43	55	7	56	38	7
ちまき	7	38	3	30	10	3	6	36	4
かしわ餅	24	58	3	53	24	1	21	57	3
かぶと作り	44	32	0	39	46	0	44	27	0
七夕の笹飾り	69	33	21	43	67	19	70	39	20
伝統的な地域の盆踊り	10	6	42	12	11	43	25	33	39
新しい地域の夏祭り	5	5	30	9	4	28	20	27	20
名月（十五夜）の飾り	32	21	2	22	28	1	30	21	2
名月（十五夜）の月見だんご	31	36	3	39	33	3	33	34	2
古くからの地域の秋祭り	4	5	32	12	6	32	20	23	27
冬至のカボチャ	2	31	0	26	3	0	1	30	0

別表 2

## 実態調査集計結果

(単位：人)

年中行事の名称・ 園行事の名称	思い出の強い行事			子どもたちに体験させたい行事		
	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 1 位	第 2 位	第 3 位
門松	0	0	0	0	0	0
餅つき	22	8	10	36	11	5
しめ縄	1	0	1	1	0	0
雑煮	4	2	0	0	0	1
七草がゆ	0	1	3	1	1	0
トンド	0	3	0	1	0	0
節分の豆まき	12	13	7	13	14	13
イワシの頭とひいらぎの小枝飾り	0	0	0	0	0	0
鬼の面作り	0	1	1	1	1	0
ひな飾り	10	4	9	4	5	5
菱餅	0	0	0	0	0	0
ひなあられ	0	0	1	0	0	0
おひなさま作り	1	0	0	0	0	1
こいのぼり	1	4	4	1	9	6
ちまき	0	1	0	0	0	0
かしわ餅	0	0	0	0	0	0
かぶと作り	0	0	1	0	0	2
七夕の笹飾り	9	14	14	6	20	17
伝統的な地域の盆踊り	1	3	2	0	1	0
新しい地域の夏祭り	1	2	5	1	1	3
名月（十五夜）の飾り	0	1	0	0	3	8
名月（十五夜）の月見だんご	2	1	2	0	0	3
古くからの地域の秋祭り	6	1	2	0	0	1
冬至のカボチャ	0	0	0	0	1	1
〔その他行事〕						
クリスマス会	3	8	3	5	5	1
お誕生日会		1	2	3	1	3
運動会	1	1	2	2	0	2
生活発表会		0	1	0	1	0
遠足	1	1	1	1	0	0
秋祭り	1	0	0	1	0	0
夕涼み会	1	0	0	0	0	0
芋掘り	0	1	1	0	0	1
花見	0	0	1	0	0	0
除夜の鐘	0	1	0	0	0	0
不動さん	0	1	0	0	0	0
たばらして（地域行事）	0	1	0	0	0	0
敬老の日	0	0	0	0	0	0

回答学生数(77人)